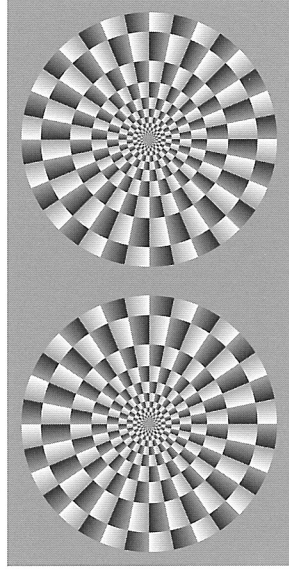


## 美術作品風になる錯視の図

### 北岡明佳



静止画が動いて見える錯視の一種。筆者の分類では、「最適化型フレイザー・ウィルコックス錯視・タイプ1」。左の円盤は反時計回りに、右の円盤は時計回りに回転して見える。

錯視図形はなぜか美術作品風に見える。錯視を発見したり作画したりするのは心理学者であって芸術家ではないから、錯視そのものに美術的要素があるということだ。

「錯視図形においては、錯視量が多いほど美しいと評定される確率が高くなる」という実験データがある。実際に、錯視図形を選ぶための予備実験をする時には、図形の美しさを錯視の強さの推定に使えて便利である。

他にも理由がある。例えば、図は静止画が動いて見える錯視の一つの「基本図形」である。その割には装飾的である。サイエンスは単純さを求めるはずなのに、これはどうしたことか。

まず、円盤を二つ描いている理由は、この錯視は中心視よりもやや周辺視で起こるからである。どちらかに視線を合わせている時、もう一方が動いて見えるという仕掛けである。

次に、この図では、グラデーションの放射状パターンを、位相を反転させながら同心円状に繰り返している。そうしないと、錯視量が少なくなるからである。これを脳の話として考えると、受容野の外側に抑制領域のある方位選択性ニューロンの関与が示唆されるということになる。

さらに、この図では、一番外側のリングを除いて、隣接する同心円の大きさは等比的になっている。その理由は、円盤が一体として回転して見えて（各偏心度におけるみかけの角速度が揃う）、知覚がすつきりするからである。

このように、一見装飾的で美術的雰囲気のある錯視アサインも、実は単純さを追及するサイエンスの結果なのである。（きたおか・あきよし 知覚心理学）